

國立臺灣大學

開放式課程

白先勇文學講座

《世界文學中的中國古典文學》

第一講 序論 — 世界文學是什麼？

授課教師：京都大學 文學部 川合康三 教授

教室：國青 324 室

時間：2012 年 09 月 11 日(二)

上午 10 點 20 分~12 點 10 分

【本著作除另有註明外，採取創用 CC「姓名標示
—非商業性—相同方式分享」臺灣 3.0 版授權釋



第 1 頁，共 7 頁。

§ 「世界のなかの中国古典文学」の意味

「世界のなかの中国古典文学」とは一体どのような意味か。そのことから考えていこう。

ここでいう「世界」とは、グローバル化と言われ、地球全体のさまざまな地域、国家が交通・通信の飛躍的な発達によって従来の距離が一気に縮まり、生活の形態も均一化しつつある今日の世界、さらにはこの傾向が今後いっそう強まる将来の世界を意味している。

そして「中国古典文学」とは、中国という一つの地域、厳密に言えば文化圏において、「古典」という歴史的にきわめて早い時期に発生し、一貫して持続してきた、伝統的な文学をあらわしている。つまり「中国古典文学」とは空間的にも時間的にも限定された文学である。

地域も時代も限定されている「中国古典文学」が、「世界」という人間の全体を収める広範な場において、どのような意味をもちうるのか。この問題に対して、「中国古典文学」は限定された地域、時代のなかでしか文学として受け入れられない文学ではなく、現在の広範な世界のなかで、価値ある文学として認められるべき特質を備えている、というのが、ここで主張したいことである。つまり「中国古典文学」は世界のなかの文学の一つとして普遍性をもっている、それを明らかにしていきたい。

このような問題を提起するのは、今日、中国古典文学が必ずしも普遍性をもつものとして認められていないという現状から発している。ではまず、現在において中国古典文学はどのように捉えられているか、そこから見てみよう。

西欧において、中国古典文学はすぐれた研究が行われているが、学术界とは別に一般の読書人、文化一般のなかで中国古典文学がいかに受容されているかといえば、それははなはだ乏しいといわねばならない。19世紀中頃にフランスにおいて中国詩の翻訳書が出された。Judith Gautier 1845-1917による『白玉詩書 Le Livre de Jade』1867である。Judith Gautierは幻想文学の小説家として名高いTheophile Gautierのむすめであり、その本には『詩経』から清朝の詩まで71首が翻訳されている（森英樹「——フランス文学と漢文学との出会い（その六）（その七）——ジュディット・ゴーチエの中国詩翻訳（1）（2）」）。彼女は中国学者ではなく、家庭教師の中国人から中国語を学んでいたが、その丁という名の中国人とともに中国詩をフランス語に移し替えたのである。丁という中国人は素性が確かでなく、読み書きや古典の知識も多少あっただろうが、いわばフランスに流れ着いたふつうの中国人であって、ことに古典に造詣が深かったわけでもない。こうした現象はヨーロッパではよくあることで、古典的教養に必ずしも習熟していない中国人が手引きとなったことはヨーロッパにおける中国古典受容の不幸であった。したがって『白玉詩書』は厳密な意味での学術書ではないし、その翻訳もかなりずさんなものであっただろうが、しかし大きな反響を呼んだ。当時、詩人として名高いPaul Verlaine、あるいはまた小説家として名高いAnatole France、そういう人たちから絶賛された。そして以後、ドイツ語、英語、イタリア語、ポルトガル語などに翻訳され、『白玉詩書』は19世紀の西欧における中国古典詩普及に大きな影響力をもったのである。それは学問的蓄積によるものではなく、Judith Gautierの詩的才能が独立した作品を

作り出したのである。

イギリスにおいては、Herbert A. Giles の“A History of Chinese Literature”が 1900 年に刊行されている。Edmund Gosse が編集した“Short History of the Literature of the World”「世界文学小史」の一つに収められている。この叢書は 19 世紀に近代歴史学が確立して通史が書かれるようになり、さらに近代国家それぞれにおける、文化のそれぞれの分野における通史が書かれる、その一つとして企画されたものであった。Giles は初期の中国学者の一人であるが、一般読書人に向けた中国文学通史として、西欧で初めて書かれたものである。

この書については、のちに 1934 年、鄭振鐸が「評 Giles 的中国文学史」（『鄭振鐸古典文学論文集』上（上海古籍出版社、1984）所収）において、Giles の疎漏を批判している。たとえば Giles は園芸の手引き書のような、文学とはみなされないものまで文学史のなかに取り込んでいるという。ただ興味深いのは、鄭振鐸は Giles が『聊齋志異』を取り上げていることも、鄭振鐸は園芸書と同じく文学ではないと批判しているのだが、周知のとおり、そののちの文学史では『聊齋志異』は欠くことのできない作品となった。鄭振鐸の時代の中国においては、小説は文学に数えられなかったことを反映している。

Giles の『中国文学史』に言及したついでに中国文学史について簡単に触れておこう。世界で最初の中国文学史は何かという問いを立てる人がいるが、ギネスブックのような問いかけは意味がない。どのようないきさつで中国文学史が生まれたのかが問題なのだ。そもそも文学史は先に述べたように近代歴史学が成立し、文化の様々な領域における通史が書かれるようになった一環として始まったものである。1890 年代の前半、日本の若い国文学者たちは西欧に文学史があるのに刺激されて日本の文学史を書き始めた。三上参次・高津敏太郎の共著『日本文学史』上下二巻が明治二十三年（一八九〇）に金港堂から刊行されたのはその早いものである。それに刺激されて中国文学の領域でも古城貞吉『支那文学史』（一八九八）を初めとして続々と中国文学史が出現した。それが中国に移り、20 世紀に入って中国でも文学史が書かれるようになった。ただ最初の中国文学史は日本で書かれた文学史の翻訳、あるいはそれに近いものであったことは、朱自清「什麼是中國文學史的主潮——林庚著《中國文學史》序（四）」（一九四七、『朱自清古典文学論文集』上、一九八一、上海古籍出版社）に「早期的中国文学史大概不免直接間接的以日本人的著述為樣本」（一三頁）と指摘されている。

このように中国文学史は日本で書き始められたとってよいが、そのことは誇るべきことでもない。以前、韓国で初期の中国文学史が日本で始まったことを話したら、たいへん不興を買った。早いことを誇るとかそういう問題ではなく、なぜ日本で始まったかを考えるべきだ。すなわち日本には漢学の伝統があり、十分の知識、方法の蓄積があった。その前提条件のうえに西欧近代をアジアのなかではいち早く受容したために両者の結合である文学史がいち早く生まれたということに過ぎない。

西欧における中国古典の受容に話を戻すと、20 世紀の初頭においては、Ezra Pound 1885-1972 の中国詩への傾倒にも触れておかねばならない。アメリカで生まれ、ヨーロッパで活動した彼は、modernism の旗手として、中国の詩と西欧の詩の融合を計り、『詩経』や李白の詩を翻訳した。Pound は中国語が読めたわけではなく、森槐南など明治の日本人学者の著作、およびそれに対

する Ernest Fenollosa のノートを参照して訳したという。

以上、西欧における中国古典文学の受容の、一般読書人に関わる部分について概観したが、Gautier と Pound については、いくつかの共通の特徴を指摘できる。

一つは、中国古典詩を翻訳、紹介した人たちが、中国学の専門家ではなく、特別に学習したわけでもなく、周囲の原文を読む人の助けを借りて、いわば間接的に中国古典詩に接したこと。

二つは、にもかかわらず彼ら自身の文才によって一般の西欧の人々に影響力をもったこと。

三つは、直接原文を読めないのに中国古典詩を翻訳した動機は、西欧にない新奇なものへの興味があったということ。彼らにとって中国古典文学は西欧の伝統とは異質の、珍しいものとして捉えていたのである。いわゆる Orientalism である。異国情緒を求める orientalism は 19 世紀の西欧絵画に顕著に見られるが、文学における中国への関心もそれとつながる。しかしそれが西洋優位の立場から見たものであり、植民地支配を正当化するものであったことは、Edward Said 1935-2003 の著書“Orientalism”1978 が説くところである。

19 世紀中頃、そして 20 世紀初めに西欧に紹介された中国古典文学は、その後、西欧においていかなる結果をもたらしたか。おそらくそれは珍しいものとしての興味に終わり、その後の西欧の文学に変化をもたらすには至らなかったと思われる。今日、英語圏の一般読者において、中国古典の翻訳をよく見るのは、『易経』、『老子』などが目立つ。『易経』は“Book of Change”と訳され、東洋の神秘的な思想として一部の興味を引いている。『老子』についてもその謎めいた箴言に興味もたれている。つまり現在においても中国の古典は神秘的なものとして捉えられているのである。

現在の思想家、文学者の発言として、Julia Kristeva は“Les Chinoises”（中国婦女）という本のなかで、李清照を高く評価する。彼女によれば李清照は「世界文学最大の詩人の一人に数えられる存在である」とのことだ。Kristeva も中国語が読めるわけではなく、近年の研究成果のうえにたつてこのような発言をしているのだが、果たして李清照を「世界文学最大の詩人の一人」といえるかどうか、またその発言が李清照の名をヨーロッパに浸透させ、理解を高めたか否かはわからない。

総じて言えば、中国古典文学は西欧において学術研究は高いレベルで行われていても、一般の読書人、文化のなかに浸透しているとは思われないのである。

では日本ではどうか。日本では今日でも中国古典文学は一定の読者、愛好者を持ち、文学の一つの分野として一応認められている。中国古典文学に関する一般向けの本は毎年相当の数が出版されている。それは爆発的に売れるというものではないが、一定の数量が出ることは、一定の愛読者がいることを示している。古典文学のなかでも突出して多いのは『三国演義』に関係したもので、数種の翻訳以外にも様々な本が出ている。正確な翻訳のほかに、著名な小説家が自由に書き直したものの、すなわち翻案もよく読まれている。子供向けの本やテレビでの人形劇も放送されたことがあった。『三国演義』の流行は近年の電子ゲームとも関わっている。若い世代は古典を読む意識はなく、ゲームとして『三国演義』の物語を楽しんでいる。彼らの『三国演義』についての知識は相当なもので、細かな人名まで知識のなかにあり、ゲームのためにはそれが必要なのだという。そのために正史の『三国志』まで裴松之の注を含めた完全な翻訳があり、それも今では文庫本となって普及している。私自身も 20 年以上前に依頼されて『曹操』という本を書いたことがあるが、それは私の書いた本のなかでは飛び抜けて多くの読者を獲得して、最近それが文庫本にもなった。日本でなぜ『三国演義』が突出して人気があるのか、私自身は十分に理解できない。文学としてはもっとおも

しろい文学が中国にはほかにたくさんあるのに、『三国演義』に限定されるのが残念に思う。

もともと通俗小説である三国演義とは別に、日本で愛好されているのは、中国の古典詩である。中国古典詩についても各種の本が刊行されている。書物のみならず、テレビでも「漢詩」を読む講座が開かれている。しかし『三国演義』が若い層にも浸透しているのに対して、「漢詩」は年配の層に偏っているように見える。

中国の文化の受容に関して、日本での近年の現象として特記しなければならないのは、漢字ブームである。漢字や成語に関する本も多く、漢字の知識を試験する「漢字検定」という、誰でも受けることができる試験が毎年行われている。その試験には1級、2級などの段階があり、もともと自分の漢字の知識を客観的に測るためのものであった。最近では会社の就職に際して、何級の資格を持っているかが、採用の手段の一つにしている会社もある。この漢字ブームと関連して、漢字学者の白川静の本もよく読まれている。白川静 1910-2006 は長年立命館大学の教授を勤め、数年前に亡くなったが、甲骨文字、金文を対象に、漢字の成り立ちを古代宗教、呪術性をもとに解明して、独自の漢字学を打ち立てた。白川の学説には中国学の学者のなかには批判する人も多く、ことに藤堂明保 1915-1985 は、白川の漢字解釈が「形」だけを対象として、漢字の「音」はまるで考慮していないことを鋭く批判した。白川の構築した古代の呪術的世界は実証するすべがなく、信じるか否かで、熱烈な信奉者と批判者に分かれる。晩年に至って、学界よりもむしろ一般の読書人の間でたいへんな人気を呼び、その本はよく読まれている。私個人は白川の漢字学の是非を語る資格はないが、一般の人々が漢字の成り立ちに興味をもつことにいささか戸惑いを覚える。漢字がどのようにできたかは学問的対象としては意義あることだろうが、ふだん漢字を使い、読む者にとっては、成り立ちよりもその字がどのような意味をもつか、どのような意味のふくらみ connotation をもつか、その方が重要であると思うのに、クイズを解くように漢字の成立だけに興味をもつのには疑問を感じる。

日本における中国古典の受容において、記すべきもう一つのことは、中国古典の邦訳がはなはだ盛んなことである。これは遡れば江戸時代から「和刻本」という名で、一種の翻訳が行われてきた。中国の原文を「訓読」して「返り点」などを施したもの、また原文を解体して訓読だけで読めるようにしたもの、そうした一種の翻訳が江戸時代にかなりある。明治以降もより日本語に近づいた翻訳が続き、今日に至るまで多くの古典が翻訳、また注釈を伴った翻訳をされている。たとえば明治書院の『新釈漢文大系』は100冊以上にのぼる翻訳を完成させている。日本における中国古典の翻訳は、古典の読解に大いに役立った。これは日本のみならず、韓国や西欧の研究者の間でも重宝されていると聞く。日本が中国古典に対して果たした貢献の一つに数えてよいだろう。

このように日本における中国古典の受容を見てくると、いかにも日本では盛んに行われているかのように見える。西欧と比べれば確かにそうも言えるだろう。しかしながら、過去の日本と比べてみると、時代とともに著しく低下していることも否定できない。

五世紀ころに中国の書籍が日本に入り始め、熱心な受容が開始したが、日本における中国古典受容のピークは江戸時代であろう。先に触れた和刻本の出版のほかに、各地の「藩校」では「漢学」、中国古典の学問が講じられた。「藩主」が開いた学校のほかに、民間でも塾が開かれ、当時は学ぶといえば中国古典に決まっていた。明治になって西欧の受容に転換すると、大きな変化が起こったが、それでも江戸時代の教育、蓄積がまだのこっていて、「漢文」、中国の文言文をもとに、日本

の新しい散文が作られていった。しかし西欧文化の侵入で中国古典はしだいに遠い存在となり、ことに戦後の低下は著しい。まず中等教育の場から中国古典は比率を極端に減らしている。戦前の教育では、「国語」と「漢文」はそれぞれ独立していたが、戦後は「国語」のなかに「漢文」が収められ、それもしだいに減っている。高校の国語の教員になるためには漢文の単位も必修であるが、しかし今ではわずかに1単位しか要求されていない。今日の日本では中国古典が社会、文化のなかで後退していると言わねばならない。

では、中国ではどうであろうか。外国人の目から見ると、やはり日本や西欧とはまるで違う存在感をいまもっているように思われる。一般の人々の生活のなかに浸透している度合いが違う。大学では「中文系」という独立した「系」（学部、あるいは学科）が設けられている。アメリカではほとんどが Far eastern Culture and Literature、つまり極東文化文学として、中国、日本、朝鮮その他東アジアがひとくくりにされている。日本で「中国文学」が文学部のなかの一つの専攻として立てられているのは、やはり西欧とは違う親近性をのこしていることを示している。

中国、台湾で「中文系」が一つの学部（学科）となっているのは、自国の文学であるから当然のことだと言うことはできない。というのは、日本では日本文学は中国文学、フランス文学などと同列に置かれていて、「日本文学学部（学科）」といった独立した部門はない。中国・台湾に「中文系」があることは、中国では自国の文化、文学に対して今日でもはなはだ重視している。それは中国にとってそれだけ伝統文化が重い存在であり、アイデンティティを保持するためにも欠くべからざるものであることを示している。

「中文系」の性格も日本の「中国文学講座」や西欧の東アジア学部とは異なっているように見える。日本、西欧ではもっぱら学術研究の対象であって、社会とは直接の関係をもたないが、中国・台湾の場合、学術研究の分野であると同時に、官僚を育成するなど、社会の人材を育成する重要な部門となっている。これも中国古典が今の社会のなかでもつ役割が日本などとはまったく異なることを示している。


とはいえ、中国においてすら、古典文学は以前に比べたら、人々のなかで比重が軽くなっているかも知れない。以前、たとえば中国大陸において「中文系」は文系のなかで最も重要な部門とされ、地位も高かったが、開放経済が進んだ現在では、法学部、経済学部が大きく進出して、中文系は後退しているように見える。

中国古典の衰退は日本においてとりわけ顕著であるが、そうした状況のなかで、私は中国古典文学を「復興」させたいと考えているわけではない。一部の日本の保守主義者は、今日の日本の文化の衰退を嘆き、かつての日本がそうであったように、中国の古典を重視し、そこに学ぶべきだと主張する。そのような意見に問題があるのは、彼らは単純に過去に戻ろうとしていることだ。時代の変化というものを認識していない。過去をすべて美化し、過去の遅れた部分、人間にとって好ましくない部分は見ようとしない。グローバル化が進んだ今日、過去に戻ることは不可能であり、今日において中国古典がどのような意味をもちうるかを模索しなければならない。

グローバル化は生活面の均一化をもたらすが、同時に文化の面では差異を際立たせる。物の感じ方、考え方——物質的な面が均一化するからいっそう、人間にとって基本的な部分、感性、思考などの違いが明確になる。グローバル化とは文化を均一にすることではなく、多様な文化を認め、人間を多様な存在として認め、そうすることによって人間の文化をより豊饒にすることなのである。

文化の一部をなす文学においても、多様な文学は文学そのものを豊かにする。中国古典文学を世界の文学のなかに置いて見ることによって、中国古典文学の特質がより明確になると同時に、世界の文学に対しても寄与できるものになるのである。当然そこには世界の文学と共通する性格もある。共通する要素と異質の要素をともに認めることによって、中国古典文学は世界の文学の一つとして他の文化圏の文学と同等の地位と価値を得るのである。

版權聲明

頁碼	作品	版權標示	作者/來源
3	早期的中国文学史 大概不免直接間接的以日本人的著述為樣本。		《朱自清古典論文集》上，朱自清 著，上海古籍出版社 出版，頁 13，1981 年。 依據著作權法第 46、52、65 條合理使用。